

2019年度 静岡県言語聴覚士会主催 専門講座 開催

2020年2月11(火・祝)に、静岡県男女共同参画センターあざれあ502会議室にて、10月13日に台風上陸により延期していた静岡県言語聴覚士会主催 日本言語聴覚士協会生涯学習プログラム 専門講座を実施しました。

10:00～12:00 「高次脳機能障害、発達障害、認知症にみる障害の神経心理学的な理解と支援」

講師：早稲田大学教育・総合科学学術院 教育心理学教室 坂爪一幸 先生



神経心理学は、思考・言語・認知・知覚・行為感情などヒトの心理現象を脳の機能との相関により解明し、心理過程の障害を持つ患者の診断・治療に役立てようという臨床医学を起点とする一分野であり、心と脳の関係を理解し、障害の理解と支援をすることが、大切な役割となっているそうです。今回のご講義で、脳の構造・機能と心の構造・機能をつなぐ視点を持つことで、障害・発達・加齢の単一的・一貫した理解と支援が可能になることを教えていただきました。すなわち、うまく行動できないこと・能力水準の背景に、どんな高次脳機能の問題があるかを分析することで、支援根拠を明確にでき、より具体的な支援方法を考え出すことができるそうです。この考え方は、成人の高次脳機能障害では、当然の考え方で、認知症でも中核は記憶障害だが、言語・認知・感情・意欲・注意・遂行機能・人格など心理・精神機能が広範囲に障害を受けている、と考えることで、治療やリハを実施していくことができ、以前のように「あきらめる」ことがなくなっている、という現状を説明して下さいました。高次脳機能障害・認知症・発達障害のいずれも、機能の「強み」と「弱み」を正しく分析し理解することで、機能の支援開発すなわち「弱みを伸ばす」こと・支援する対象を明確化することにつながるそうです。発達障害では、行動観察や知能検査・発達検査による能力水準から支援方法を考える傾向にあり、目立つ行動に対策を立てる傾向があるが、それでは「伸ばす視点」を欠いた対症療法や支援の具体化にかけることになるため、高次脳機能障害・神経心理学的症状としての理解が不可欠であることを、わかりやすい図表や事例紹介を交えながら、丁寧に教えていただきました。機能の強み・弱みを知る際に、既存の知能検査や評価バッテリーの点数だけを見るのではなく、検査時や日常生活の患者の様子から多方向・複数の評価・判断を行うことが大切であることも、教えていただきました。発達障害は、神経成熟が遅滞・神経回路形成が偏向・高次脳機能が遅滞・偏向していると考えられることができるが、対応は、高次脳機能障害や認知症に比べて遅れている現状があるそうです。また、脳は可塑性があり成熟と学習による変化が可能で、機能を使うことで働きに変化があり、「自発的な使用をする」ことが大切になっていくそうです。脳の構造と機能は相互に作用し、働きが構造を調整していくところがあること・脳領域で変化の可能性に差があり、前頭連合野や側頭・頭頂連合野のように高次脳機能と関連性の高い成熟が遅い領域ほど、回復の可能性があるとされています。

支援のタイプとしては、本人への理解をうながす関係者支援型支援・環境調整型支援、道具の工夫である能力補填型支援、高次脳機能に注目した能力代償型支援・機能改善型支援、不安の軽減を図る心理安定型支援、行動変容型支援があることも、教えていただきました。

先生のご講演の中で「高次脳機能障害の問題に適切に対応できるのは、STである」という文言があり、高次脳機能障害・認知症・発達障害の方に支援を行う専門職として、適切ななかかわり・発言ができるよう、日々の臨床にあたる義務を感じました。

講義に対する感想（アンケートより抜粋）

- ・目立った行動への対処だけを考えるのではなく、その行動・能力の背景にある高次脳機能の問題をとらえることが大切だと思った。能力・行動に目がいきがちだが、自分自身の高次脳機能障害の知識を深め的確なアプローチを選択できるようにしたい。
- ・神経心理学的な視点からのアプローチ方法がわかり、勉強になった。指導の根拠を考える大切な視点を教えていただいた。本人の強み・弱みを神経心理学的な視点でとらえていく大切さがわかった。評価・介入の際は、複数の高次脳機能のどこが得意でどこが不得意なのか、まずは理解しなくてはいけないと思った。高次脳機能障害・認知症の臨床で、神経心理学的な視点を使いつつ、強み・弱みを理解するように評価していたことが、本日の講義で改めて整理され、根拠を持って理解することができた。機能に対する評価の重要性を再確認できた。機能の自発的使用をうながすことは、臨床でもとても必要であると、改めて感じた。障害名でひとくくりにしてしまう考え方では、正しい介入ができないと思った。脳の成熟度と学習や機能改善が関連することを知りました。
- ・発達障害・認知症・高次脳機能障害ともに考え方・支援方法の見つけ方は共通していると思った。小児から高齢者までの一貫した見方や考え方について、日頃もやもやしていたものが、すっきりした。
- ・以前成人の失語症のリハをしていて、現在は小児のリハをしており、高次脳機能障害の知識をフル活用しています。これまでに先生のようなお考えを持つ方にお会いしたことがなく、大変心強く思いました。臨床の中で成人の高次脳機能障害と自閉症児の共通点を感じることはしばしばありますが、今回の講義で、高次脳機能をきちんと理解することが、小児の臨床にも、とても大切だと教えていただいた。発達障害と高次脳機能障害を関連させて考えることが少なかったなので、自分の考えの幅が広がった。小児の発達障害を理解し適切な支援方法を選択していくためには、発達障害の専門書だけでなく、成人の高次脳機能障害の勉強をしていく必要性を感じた。
- ・既存の知能検査や評価バッテリーの点数だけをみるのではなく、検査実施時や日常生活の患者の様子から多方向・複数の評価・判断を行うことが可能であることを勉強できた。既存の検査に頼りやすいため、点数以外をみる視点・判断できる視点を増やしたい。一つの課題で複数の能力を評価できる観察力を養っていきたい。
- ・脳の働きを親や支援者に、子どもに愛情をもって受け止める態度とともに、どのように伝えていくか、課題を感じた。機能評価や解析は、STの強みだと思うので、それを支援方法につなげご家族に説明していく大切さを確認でき、日々の臨床で頑張ろうと思った。
- ・「子どもは、もう頑張っているのだから、もっと頑張っただけ、ということ、自尊心を傷



つける」という言葉は、とても勉強になりました。

- ・高次脳機能障害とは、現在もこれからも課題となっていく障害であると感じた。
- ・嫌な気持ちを起こさない接し方ができるよう、心がけて評価・支援をしていきたい。
- ・症状・病巣を分析し、訓練だけではなく環境調整も考えた介入を実施していきたい。
- ・高齢の患者様と接する際に、とても参考となる講義だった。
- ・以前幼稚園教諭や療育関係者に講義する機会がありましたが、先生方に講義内容が伝わらないと感じることがありました。本日の講義を聞いて、その時のもやもやの原因がわかりました。
- ・図表がわかりやすく、理解しやすかった。
- ・具体的な事例を出していただき、理解が深まった。

参加者動向

- ・参加者総数 53名 (県士会員 44名 県内非会員 3名 県外非会員 6名)
アンケート回収数 46名 回収率 86.7%
- ・専門講座への参加回数 初めて 27名 2回 10名 3回目 3名 4回目 2名
4回以上 1名 6回 1名 10回 1名 未記入 1名
- ※県内開催ということで、参加しやすかったのか、半数の参加者が、今回初めて専門講座を受講しています。
- ・「今後、県士会で専門講座を実施したら、参加しますか？」
是非参加したい 21名 興味のあるテーマなら参加したい 21名
自宅から近い地域開催なら参加したい 3名 回答なし 1名
- ※「是非参加したい」と「興味のあるテーマなら参加したい」が、同数となっています。
生涯学習プログラム修了を目的とする方と自己研鑽のために自分が興味のあるテーマなら参加したいと考える方がいらっしゃるようです。

★2020年度は、11月29日にプラサヴェルデ(沼津市)で、全国研修会(専門講座2講座)を全国協会から委託され、実施します。詳細は、ニュースレターなどでご案内します。

静岡県言語聴覚士会主催 2019年度 第3回基礎講座 開催

13:30~14:45 「言語聴覚療法の動向」

講師：はいなん吉田病院 川村ひとみ

14:55~16:10 「研究法序論」

講師：聖隷クリストファー大学 リハビリテーション学部 中村哲也

2020年2月11(火・祝)に、静岡県男女共同参画センターあざれあ502会議室にて、10月13日に台風上陸により延期していた静岡県言語聴覚士会主催 2019年度第3回基礎講座を実施しました。



「言語聴覚療法の動向」参加者26名、「研究法序論」参加者25名に対し、中村先生・川村先生には、丁寧で、わかりやすくお話ししていただきました。川村先生のご講義では、クリッカーを使用して、参加者の摂食嚥下障害の臨床経験や日本語以外の言語を使用する患者さんの臨床経験について把握をする受講者参加型の講義を実施していただきました。参加者の皆さんにも、熱心に受講していただきました。

